

[要旨]

## 「ユダヤ教の本質」をめぐる論争と世紀転換期の ドイツ・ユダヤ教

丸山 空大

本稿は20世紀初頭にドイツ・ユダヤ人の中で起こった「ユダヤ教の本質」をめぐる論争を取り上げる。この論争は、世俗化とドイツへの同化を規定路線として進展してきた近代のドイツ・ユダヤ教が、この路線に関して大いに動揺し、自問した時期におこった。それは、ユダヤ教とは何なのか、またユダヤ人とは誰なのかというアイデンティティをめぐる論争であると同時に、ドイツにおけるユダヤ人共同体のあり方をめぐるイデオロギー的な問題でもあったといえる。本稿ではまず、19世紀後半から20世紀前半にかけてのユダヤ教の状況を概観する。その後、「ユダヤ教の本質」をめぐる論争がどのようなものであったのか、これに参加した幾人かの論客（レオ・ベック、イザーク・プロイアー、ヤコブ・フローマー）の議論を通して明らかにする。そして最後に、同時代のプロテスタントのリベラル派との関係を考慮に入れながら、この論争を世紀転換期ユダヤ教の歴史の中に、位置づけてゆく。